

## 編集後記

---

本誌の過去3号を振り返ってみると、特集のテーマとして、2010年と2011年は「新図書館システムの導入」、そして前号の2012年は「慶應義塾図書館開館100年」「電子学術書利用実験プロジェクト」を取り上げてきた。図書館システムのリプレース、未来に向けたプロジェクト、そして大学の象徴とも言える図書館の器となる建物の100周年、と言ったこれらイベントの裏側で、現場の図書館業務も時代の流れに沿って変化し続けている。機関誌としての本誌の役割を考えた時、原点回帰という大げさであるが、今号の特集に現場の最前線の動きを取り上げようというのは自然な思いからであった。

今回の特集は「教員・学生との結びつき—メディアセンターの新たな取り組み—」とした。市古執筆の記事で紹介されているような教員との新たな連携の可能性も出てきているが、ここ数年の本誌の記事として目立っていたのは、理工学メディアセンターのS-Circleを始めとする、現在では“ピアサポート”という言葉でくることができ、学生の力を活かした新たな試み・サービスに関するものである。今号の記事のいくつかでも触れられているが、本学には「先に学んだ者が後から学ぼうとする者を教える」という精神を意味する“半学半教”という言葉があり、それぞれの事例はその実践と捉えることができる。

図書館でピアサポートが展開される要因の一つとして、学生や教員の力を活用して図書館サービスの改善を図ることが、図書館にとって違和感ないものとして定着しているのだということが言えよう。今回、特集には含めなかったものの長坂執筆の「3Dプリンタ、ファブスペース、コンサルタント」でも教員・学生とともに取り組んでいる様子が報告されている。機材を用意するだけでなく、それをより意義のある費用対効果の高いものにして行こうとする時、能力のある層との協働に結びつくのはあるべき形と言える。今回の特集で本学の具体的な協働の事例を網羅的に紹介することができた。それぞれの活動の今後の展開に注目したい。

(関 秀行)

---

### 誌名変遷

八角塔 : 1号(昭42(1967).7) - 6号(昭45(1970).3)  
KULIC (ISSN 0913-0705) : 1号(昭45(1970).10) - 26号(1992.11)  
MediaNet (ISSN 0919-8474) : No. 1(1993.11) -

---